

# 看護研修

## 産科再開の経過報告

3西NS ○宮本 典子, 黒瀬 真知, 関口 史絵, 南部 沙緒, 小泉由貴美

### I. 研究の目的

近年の周産期医療を取り巻く大きな変化や、妊産婦のニーズの多様化に対応するために、助産師活動が見直され、院内助産システム、フリースタイル出産など助産師に求められるものが変化している。

本研究では、産科再開の準備から現在までの経過やケアを振り返り、当院での助産師活動のあり方と、可能性を検討した。

### II. 方法

2008年1月～10月までの、患者数・分娩件数・助産師外来数を集計し、活動の経過やケアを想起しまとめる。

### III. 結果

産科入院数は、4月4名、5月7名、6月15名、7月10名、8月12名、9月24名、10月18名だった。分娩（帝王切開）件数は、4月2（2）件、5月5（4）件、6月5（1）件、9月8（3）件、10月8（2）件だった。助産師外来数は、7月3件、8月2件、9月1件、10月7件だった。

2008年4月、産科が再開し、ケアや指導を行っている。退院前には『出産感想ノート』に妊産婦からの妊娠・出産・産後に至るまでの色々な感想を自由に記載してもらっており、自分達のケアの振り返りや分娩前の方への参考資料などとして使用している。

外来では妊娠期から出産・産後までの継続的・個別のケアを実践している。同年7月産後の育児・母乳相談の場として助産師外来を開始した。同年9月、小児科と産婦人科の混合病棟になった。現在は平均臨床経験9.8年の助産師15名で産科ケアを行っている。

### IV. 考察

今回の産科再開後、分娩件数は開設時の目標だった月15例に届いていなかった。妊産婦の出産感想ノートからは、産科の情報公開と、産科に特化したホー

ムページの追加が分娩数増加につながると考える。さらにリスクの高い出産期には助産師のケアで安心感を提供できるため、これが友人などの口コミやリピーターを増やす事につながると予測できた。

助産師外来数は増加していた。他院出産者も含め母乳・育児の相談があり、地域における助産師外来の存在が認知されてきている。

妊娠は蛸崎らの文献<sup>1)</sup>から思い出に残り楽しく過ごしたい思いと、出産・育児に対する期待と不安が入り混じった時期であることが分かる。以上から助産師は生む力や親になる力を支援し、妊産婦や家族のニーズを把握しケアする事が、出産や育児の満足につながると考える。そのために保健指導を通して、妊娠・出産・育児の面白さを伝える事が私達の重要な役割だと考える。

助産師独自のケアや指導は、助産師自身の職務満足にもつながると多くの文献で言われている。当院の助産師の臨床経験は9.8年であり、ローリスクな方の妊婦健診や分娩介助を主体的に行う事が可能であると考えられる。

今後は、妊産婦が身近に相談できる専門家として妊娠期から育児期までの継続的なケアの場としての助産師外来を通して役割を果たしていきたい。

### V. 結論

1. 産科の情報公開と助産師の安心感を与えるケアがリピーターを増やす事につながる。
2. 退院後の育児・乳房ケアの相談の場として助産師外来は地域に認知されてきている。
3. 助産師は保健指導を通して妊娠・出産・育児の面白さを妊婦に伝えていく役割がある。
4. 助産師がローリスク妊産婦の健診や分娩介助を主体的に行う事は、臨床経験年数から検討可能である。

### 引用文献

- 1) 蛸崎奈津子：岩手県内で出産した褥婦の助産師に対する認知と期待、岩手県立大学看護学部紀要、Vol 9、p73、2007